

天国の父母へ想うこと

磯子区支部 清水 妙子（子）

戦没者 神谷 秀雄

戦没地 沖縄県

終戦から六十五年という今、焼けつくような厳しい今年の夏のさ中、終戦記念日も間もなく来る。広島、長崎の原爆投下も放映され感慨も新たに感じた。最近では戦争について語り継がれていきたいが体験者も亡くなられ、だんだん戦争についての意識が薄れているのはいけないと感じる。私も母が生きていた時は余り興味を持たずに生きていた事を今反省し、自分を恥ずかしく思い、惜しくも感じ、今からでも遅くないから戦争の犠牲者の家族として、もっと世論を興して、戦争の悲惨さをどの人にも知ってもらいたいと思いはじめた。

日本の終戦から六十五年も過ぎた今でも、戦いは世界各地で絶え間なく続いて来ている。地域戦争、宗教に係った紛争、各国間の利害から起きた紛争、テロ、これらはいつ何処で起きてもおかしくない程、報道されている。それらの戦いにより何万人という人が亡くなりましたというニュースだけ聞いても、人数だけで何も感じなくなってしまう自分、本当はその犠牲者一人ひとりには、何人もの家族が悲しみ、それからの人生が一変してしまうのに・・・

一体なぜこのように殺し合いになってしまふのか。古代からの戦いを振り返っても、武器こそ違っても殺し合うことには変わりないのだ。現代になればもっと兵器も威力があり恐ろしい。

さて六十五年も過ぎた今、当時三歳だった私は六十八歳となった。三歳で父は戦死した、沖縄戦での戦死と聞かされていた。沖縄で死んだ父の気持ちを考えると可哀想でならない。

昭和二十年五月、沖縄は激戦の最中だった。父はシュガーヒルと呼ばれる首里という地で、第一小隊長であつたらしい。斬り込み隊長であつた為、負傷していたにもかかわらず、二十日間隊と共にあり、米軍の猛攻撃で亡くなった。

私達残された三人、二十九歳だった母、三歳の私、一歳の妹は父が出征した地、石川県金沢市にそのまま残されました。東京に戻ることもできずに、そのまま金沢で生きることとなった。母はどれ程途方に暮れたのだろう、私はその訳さえも知らずに、女三人の家庭と思い暮らし育ててもらった。母は無口の人だった。愚痴も言わずに毎日働きに出ていた。父がなぜ戦争に行き、どう戦死したかなど語る暇もなかったのかもしれない。今思えば残念なことに私もその事を特に聞こうとしなかった。

その母も二年前に亡くなってしまった。亡くなってから私は母の事を思い大いに自分を反省した。もっと優しく接してあげればよかった、辛さを一人で我慢していたのだろう。娘達を育てるのに必死だったのだろう。今になって私は「お母ちゃんごめんね」と手を合わせている。あの頃は貧しい生活だった。どの人も食べるために大変だった時代、我が家も惨めな生活だった。母は昼間はいない、一部屋だけの間借り生活、冬の暖房は火鉢しかない、火鉢の上にまたがって暖を

とつていて母に叱られたのも思い出だ。でもこんな侘しい生活も私にはその環境が私に与えられた生活と想っていたし、私なりに貧乏や欲望は我慢していたように想う。今となればあの貧しさが懐かしい。父については可哀想な死に方だと思い、母についてはよく頑張つて九十年生きてくれたと、二人を尊敬せずにはいられない。

母が死にそうになってしまった頃、私は自分の父親の事も、もっと知らねばと思うようになった。母が亡くなつてから出てきた遺品、数は少ないが、戦記や戦場からの便り、出征する前に書いた母への生活の仕方の指示書、これらを発見した私は、父の筆跡を無中で追い、父の姿を想像した。きつと父は死ぬと解つていたに違いない。それが哀れに思えた。母が亡くなる迄は私は沖繩の慰霊に行きたいとは思わなかった。なぜかそこを見たくない気持ちが強くて絶対行かないと決めていた。しかしある時、急に心が変わった。「行かねば私」と、そして私は友人と沖繩の平和の礎を訪れた。そこで父の名を探し、その前で手を合せた。涙が溢れてしまった。「今迄お参りに来なくてごめんなさい」と心から手を合せた。私は戦争の犠牲者の一人として、これから先、日本の平和を祈り、戦争とはどういうものを人にもたらしたか、この悲劇は繰り返してはならず世界中の紛争も早く解決出来るように、自分も関心をもち学び続けなくてはいけないと思つている。